

チャプレンより



與賀田チャブレンは立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業ではさまざまなお話をしてくださいます。

クリスマスのプレゼント

チャブレン 司祭 與賀田光嗣
クリスマス季節には、教会や教会附属の幼稚園などでは、よく聖劇（ページェント）が行われます。聖劇とは、クリスマスの出来事を劇で表現するということで、イエス様の御降誕にまつわる話の劇です。

劇では、まず天使ガブリエルが聖母マリアのもとに訪れ、イエスの懐妊を告げるところから始まります。

劇の中では詳しく触れられていませんがこの時マリアは夫となるヨセフと婚約をしていました。（当時の常識で考えると、二人とも一五、六歳の若さです）、結婚のその日まで離れて暮らしていました。ですから、これは他から見ると不義の妊娠であり、当時そのような女性性は石打ちで殺さなければなりませんでした。

ヨセフはマリヤの妊娠を知り、密かに婚約を解消しようとしています。未婚であれば、マリヤは殺されなくてすむからです。代わりに、二千年前の女性に人権もない時代に、シンゲルマザーとしてマリヤは生きなくてはなりません。しかし、ヨセフは夢の中で天使に勇気づけられ、マリヤとイエスを守る生涯を決意するのでした。

マリヤの出産が近づいた時のことです。ローマ帝国皇帝が全領土の戸籍調査をするため全ての領民は本籍地に行かなければいけませんでした。戸籍調査をし、税収を確定させるためです。若く貧しい夫婦は、権力者によって翻弄されます。

身重のマリアと共に、ヨセフは自分の本籍地であるベツレヘムに着きます。宿屋を探しますが、どこも満員で泊まることはできません。いえ、もしこの夫婦にもっとお金があれば、立派なところでしたら泊まることもできたかもしれません：

聖劇では、ヨセフ役が「トントントン、トントントン、一晩泊めて下さいな」と歌う一幕があります。それに答えて宿屋役が「とつてもとつてもお気の毒、部屋はどこも満室で、向こうの宿屋へ行って下さい」と歌い上げます。これが二、三回繰り返され、若い夫婦はたらい回しにあい、最後にやつと空いている馬小屋へ二人は通され、そこでイエス様がお生まれになります。

二千年前のクリスマスの出来事は、私たちの無理解や、冷たさ、自己保身を表しています。同時に、神様は私たちの貧しさや弱さの、只中に来られることを意味しています。そして、私たちの心が開かれることを通して初めて、イエス様を迎え入れることができることを教えてくれます。

その意味で、二千年前には「宿屋は満員です、おかえりください、他を当つて」という宿屋の役割が必要でした。

聖劇では宿屋役はあまり人気がありません。マリアとヨセフとお腹の中のイエス様を、寒空の下へ追い返す役だからです。

ヨーロッパのある村の教会で、クリスマスイ

ブの日に、聖劇が演じられていた時のことです。例年通り、マリアとヨセフを追い返す一幕がやってきました。

宿屋役の少年は台本通りにマリアとヨセフを追い返しました。ですが、その直後に、泣きながら「イエス様、僕の家へおいでよ！」と叫んだのです。

この日の聖劇は、例年とは異なり、宿屋の主人の家にて、イエス様がお生まれになることとなりました。

これはとても素晴らしいハブニングです。とても素晴らしい台本破りです。誰かの痛みを感じ、心を開いて招くという生き方がクリスマスの夜に与えられたからです。

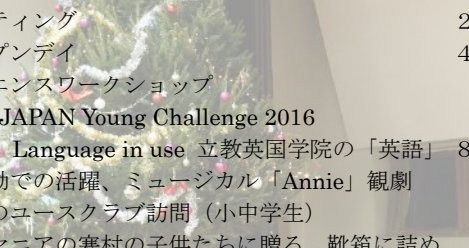
この痛みを英語で compassion (憐れみ、同情、共感と訳されます) と言います。

compassion とは com 共に、と passion 受難（十字架のキリストの苦しみ）という言葉から出ています。

主イエスは私たちの痛みを知るため、最も貧しいところにお生まれになり、人間の暗闇の只中で十字架に挙げられました。そのご生涯を通して、私たちが胸の痛みを覚えるため、私たちが神と人と共に生きるため、私たちのもとへ来られたのです。

クリスマス、christ mass、即ちキリストのミサの日には、心が開かれるという素敵なブレゼントが、全ての人に贈られています。どうか皆さんが良いクリスマスをお過ごしになりますように。

ニューホール前で
昼寝をする野生の狐。
終業礼拝後からよく
姿を現すようになりました。



第2回 チャプレンより	1
アウティング	2～3
オープンデイ	4～5
サイエンスワークショップ	6
UCL-JAPAN Young Challenge 2016	7
特集 Language in use 立教英国学院の「英語」	8～10
部活動での活躍、ミュージカル「Annie」観劇	
地元のユースクラブ訪問 (小中学生)	11
ルーマニアの寒村の子供たちに贈る、靴箱に詰めたプレゼント／交換留学生の滞在 (中学部二年)	12

特集 Language in use
立教英国学院の「英語」



アウテイング

『晩禱』

高一 白井 千晶
チャペルに入ると、壁一面に色鮮やかなステンドグラスが広がっていた。

高い天井に沢山の柱や像、今まで見たことのある教会とは桁違いのスケールだ。

今回のアウテイングの行き先はケンブリッジだった。ガイドツアーや面白い物など色々楽しみはあったが、特に印象に残ったのはチャペルでの晩禱だ。

キングズカレッジ内のチャペルは、十七世紀の内乱中に、兵士たちの野営所とされていたそう。けれど、このチャペルはそれを感じさせないほど綺麗で厳かな雰囲気を感じさせていた。無数のろうそくの前で聖歌を歌うのはケンブリッジ・キングズカレッジ聖歌隊だ。長い歴史と伝統を持ち、立教のクワイヤーにあたる。クリスマススイヴのキャロルが英国全土に放送されるほど有名で、どの曲もクオリティーの高さに驚かされるばかりだった。

小さい頃からステンドグラスが好きで何十分も離れなかった私は、礼拝中も時々顔を上げては見ていた。

夕方の光が差し込んできらきら光るガラスは、高校生になった今でもずっと見ていたいと思った。

礼拝は毎日受けているものなので行く前は特別に感じなかったが、この晩禱ではいつもと違う空気を感じることが出来た。同じ礼拝でも場所が変わると雰囲気も変わる。

今回の事に限らず、同じ事ばかりだと思わずにこれからも色々な場所に出掛けてみたい。

高校二年生アウテイング

十月五日、高等部二年生はオックスフォード大学周辺の見学を行いました。

九時に学校を出発し、十一時頃オックスフォードに着きました。オックスフォード大学は、独立した三十九の大学の総称なので、街全体がキャンパスです。アカデミックで、歴史と情緒にあふれた街には、観光客もたくさん来ておりにぎやかでした。街を少し歩き解散、その後グループ行動となりました。先輩や先生からおすすめるお店を聞いて直行する生徒あり、街を歩きながらおいしそうなお店を発見する生徒あり、風の強い寒い日でしたが、どの顔もととても楽しそうでした。

昼食後、クライストチャーチカレッジ前にて再集合し、英国人ガイドの案内による大学見学ツアーを行いました。この大学はオックスフォードでも最大規模の大学で、一五〇〇年代に建てられました。キャメロン元首相やサッチャー元首相、作家のルイス・キャロルもこの卒業生だそうです。生徒たちは英語の説明に熱心に耳を傾け、写真を撮りつつ巡ります。特に生徒の心に残ったのは、映画ハリーポッターで使われたグレートホール（大食堂）です。映画に出てきたそのままの食堂に、ハリーポッター好きの生徒たちは大興奮！今でも食堂として使われているとのこと、素敵な内装、大きなステンドグラスのホールでとる食事はさぞおもしろいだろうな……と思いを馳せていました。

その後、再び解散し、夕食をとって帰路につきました。

帰校後、「以前よりもクラスの人数が増えていて、他のお客さんの邪魔にならないように気を配った」という声や「英語のツアーが思ったより聞きとれて嬉しくなった」といった声があり、高校生として良い経験ができたことを感じました。また、

怪我のために残念ながら参加できなかった二人の生徒を気遣ってお土産を買った生徒たち、帰りのバスでにぎやか過ぎるくらいににぎやかに、クラスみんなで盛り上がる生徒たちを見て、団体としてのまとまりも感じました。これから始まるオープンディ準備にも期待が高まります。心に残る楽しいアウテイングとなりました。

『最後』

高三―二 三村 小夏

あー、もう最後のアウテイングだ、そう誰かの泣き声が耳に入ってきた。私は耳を疑った。正直まだ信じることができなかった。「最後」という言葉が引つかかったのだ。一年前から覚悟はしていた。これから行うすべての行事がもう「最後」なのだと。オープンディのクラス企画、合唱コンクール、球技大会……一つ一つ終わっていった。だがアウテイングだけは、行く場所が違いうしろ、毎学期あった。そんなアウテイングももう今日で最後、そう考えるとんだか急に涙がこみ上げてきた。

アウテイング当日。私たちはロンドン・アイ、大英博物館、ミュージカル、ショッピング、たくさんさんの事を全力で楽しんだ。特にロンドン・アイは私の中で特別な思い出となった。大英博物館やミュージカルは何度も見た事があった。だがロンドン・アイはいつも外から見ただけで終わっていた、ロンドンに住んでいるのに乗ったことがなかった。クラス皆で乗ったこの思い出はかけがえのないものとなった。

帰りのバスの中でふと周りを見渡した。笑いあっている人、話している人、寝ている人、そんな皆の姿が目映る。三年間あったという間だったな、ただそう思った。通ったことのない丘を越え、たくさんさんの不安や期待を抱えて校門をくぐった日がついにこの間のように感じる。だが、とても早く感じたけれど、思い出をよく思い返してみ

ると、一つ一つがすごく濃いもので、楽しい事ばかりではなかった。辛い事ももちろんあった。そんなたくさんさんのことを得て、何周りも成長した三年間だったと思う。もう行事はほとんど終わってしまったけれど、毎日共に生活する仲間、先生方がいるこの貴重な環境での生活を悔いなく過ごしていきたい。



高2 Oxford



高1 Cambridge



高3 London

小・中学生アウティング

朝起きて、見上げると真っ青に晴れた空。なんとラッキーな！まさにアウティング日和です。小中学生の目的地はウィンザー城。うれしいなあ、と思わず笑いがこぼれるほどよい天気です。

ロンドンの真西にある、「エリザベス女王の週末の城」に着くと、ちょうど十時半。十一時の衛兵交代見学にちょうどいい時間です。ロンドンのバッキンガム宮殿に比べると小規模ですが、ここウィンザーでも見られます。時間が近づくと、街の通りの向こうから器楽隊の音楽が聞こえて来、衛兵たちが勇ましく行進してきました。キラキラした金糸の飾りのついた真紅の制服は、とてもキリッとしていて、姿勢もよく、肩で風を切るような衛兵たちの姿は格好よいものでした。

お昼まで時間がちよつとあるので、このあとに、有名なイートン校 Eton College への散策に出発。実はウィンザー城から歩いて十分ほどです。石造りの美しいたたずまいのイートン校の建物の間に立っていると、お昼の時間なのか、イートンの制服をまとった学生たちがハウス（寮）に帰ってゆく姿が。今日二度目のラッキーです。白シャツに白タイを結び、長めの裾をひるがえた真つ黒なスーツ姿にじんわりと感動を覚えました。

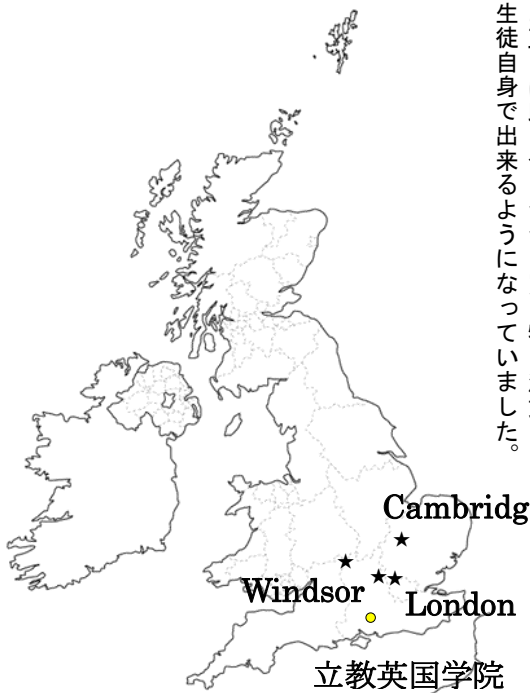
お昼は班に分かれて、思い思いに。先生に教えてもらった、タイ料理のバイキングのお店でおなか一杯食べた生徒もあれば、久しぶりのマクドナルドや、カフェのランチも楽しみました。

午後一番にウィンザー城内の見学に入りました。事前に、『What is this? シリーズ』と題して、ウィンザー城の六枚の写真が、毎日少しずつ教室に貼られましたが、ウィンザー城では、「これは何だろう?」「これはどこにあるだろう?」と、実際に

探したり、想像したりするしくみ。壁につくられた十字型の穴や、四角形に切り込まれた城壁のてすりの謎を予想したり、どう見ても彫像にしか見えない時計に首を傾げたり、ピーター・ブリューゲルの著名な絵画も、先生に説明してもらいました。予想外だったのは、濃い緑色のタンブラー。あ、あれだ！と見つけると、思わぬ大きさに度肝を抜かれてしまいました。写真で見ると、かわいらしいタンブラーだったのですけれど。

お城から出てくると、居住スペースの衛兵が午後の交代で行進してくるところに出会えました。本日三度目のラッキーです。真つ青な青空に、はちみつ色の宮殿。真つ赤な衛兵。くつきりとした風景が今でも心に焼き付いています。

夕方から近くのショッピングセンターにうつって、ショッピングと夕食を楽しみ、ゆつくりと学校に戻ってきました。四月に入学した生徒も、九月に入学した生徒も、お互いに助け合いつつ、買い物も注文も、生徒自身で出来るようになっていました。



小6～中3 Windsor

OUTING

【2学期の行事】

9月4日 始業礼拝
9月5日 高等部実力テスト
9月11日 避難訓練
9月17日 2016 UK-Japan Scientist Workshop 報告会
9月18日 UCL-JAPAN Young Challenge 2016 報告会
9月22日 午後ブレイク
9月25日 第36回因数分解コンクール
アップルデイ外出
9月27日 全校写真撮影
10月5日 ロンドン日本人学校文化祭外出
10月5日 アウティング
10月8日 実用英語技能検定第一次試験（1級、準1級）
10月9日 実用英語技能検定第一次試験（2級以下）
10月14日 教室、ドミトリー移動
10月15日 オープンデイ準備期間（～10月22日）
10月23日 オープンデイ
10月24日 オープンデイ片付け、オープンデイ閉会式
10月30日 生徒会主催 Guildford Shopping

11月6日 実用英語技能検定第二次試験（準1級～3級）
11月10日 CAMBRIDGE 英検 KET、PET
11月14日 Youth Club 訪問(小学部、中学部2年生)
11月14日 CAMBRIDGE 英検 FCE
11月23日 期末考査（～11月27日）
11月29日 答案返却（、30日）
12月1日 スクールコンサート
12月2日 生徒会主催クリスマスコンサート・高3生を送る会
ELMBRIDGE VILLAGE 訪問 キャロリング
クリスマス礼拝
12月3日 終業礼拝 生徒帰宅
12月4日 中学部3年生補習（～12月9日）
12月10日 中学部・高等部入学試験A日程（、11日）
中学部3年生帰宅

オープンディ

十月二十三日（日）秋晴れの中、オープンディが行われました。今年は例年に比べ二週間早い日程での開催になったので、準備の時間も短くなりました。無事にこの日を迎えられるのかという不安と焦りに見舞われる生徒もちらほら見られましたが、最後の最後まで粘り、そして、こたわって何とか準備完了！今年のオープンディのテーマは「Inspire」です。

オープンディは、立教英国学院を皆様に知ってもらうための日です。保護者の方や兄弟姉妹はもとより、地域の方々、ホストファミリーになつてくださった方々、交換留学で知り合った友達、そのまた友達や家族……と、本当にたくさんのお客様にご来場いただき、五〇〇名を超す大盛況となりました。

小学生「Enjoy! Tea Time」

中学部一年「空に描く夢」

中学部二年「ガリガリ君」

中学部三年「ポケモン 魂（ソウル）」

高等部一年「世界はこれをトイレと呼ぶんだぜ」

高等部二年「NIPPON GO」

高等部三年生は、食堂や焼き鳥、から揚げ、和菓子・パン売り場、バザーに福引といった各ブースでお客様をもてなしました。

また、スクールコンサートや、クラスでの展示とは別に、学年関係なく集まって活動する生徒会主催の企画もありました。剣道、パフォーマンズ、茶道、琴、フラワーアレンジメント、チャリティー、演劇の七つの企画に分かれて教室展示や舞台発表、デモンストレーションを行いました。

「オープンディの思い出」

中三 大石 桜子

ドラムロールが早まっていくと同時に自分の心拍数もバクバクとあがって行くのが分かった。ドラムロールが止まり周りが一気に静まりかえった。そしてまさかの総合優勝第一位。

「せーのっ。」

初めてだった。くす玉を割ったのも、こんなにクラス全員で喜びあつたのも。毎年やってくる立教最大イベント、オープンディ。何度経験してもその年はその年の思い出として、今年は今年の思い出として、決して飽きる事無く色んな形となって私の記憶の中に深く刻まれていく。そして、色んな形の中でも今回は特別だった。一人でも足りなかったら優勝なんか出来なかったかもしれない。このクラスのメンバーがいて、そして心強い担任の先生、副担任の先生がいて。くす玉のヒモを引いた瞬間、この感謝の気持ちと嬉しさでじんわりと目が熱くなったのを覚えている。

励まされる事、励ます事。悩みを聞いてもらった事、悩みを聞いた事。こんな風

に人を支えてもらってばかりいた私も今年

は少し、他人を支えるという事がこの一週

間で出来たかもしれない。多くの事を学べ

た一週間だった。クラスのメンバー、先生、

そしてこんな素敵なイベント、オープンデ

ィがある事にとっても感謝している。



中3「ポケモン 魂（ソウル）」



中1「空に描く夢」



小学生「Enjoy! Tea Time」



高1「世界はこれをトイレと呼ぶんだぜ」



中2「ガリガリ君」

OPENDAY

OPENDAY チラシ配り

毎年オープンディのチラシを地元の方々のポストに入れさせてもらっています。中には生徒の姿を見つけお家の中からわざわざ出てきてくださった方と会話をする生徒の姿もありました。このチラシを見てオープンディに来て下さる方も毎年たくさんいらっしゃいます。



『有終の美』

高一 千野 智哉

「模造紙部門第一位は……(ダカダカダカダカダカダカダカ……ダン!)」高等部一年 世界はこれをトイレと呼ぶんだぜ」

これを聞いた時、とび上がって喜んで興奮がおさまらなかつた。

私は、OPEN DAYで模造紙班として活動した。字が汚く、サボりぐせのある私は、大きな仕事はもらえず、最初はひたすら雑用係として働いていた。それでも、その雑用は、「消しゴムかけ」という模造紙の仕上げである重要なものだったので本気で取り組んだ。そうこうしているうちに模造紙は全て完成し、色々な班を転々としながら手伝ってOPEN DAY当日になった。お客様が入場してくる前に一人でクラス展示を見て回った時は、まだなんだかやりきったという感覚がなかつた。

徐々にテンションが上がってきたのはクラス展示の受付をしていたときだった。そこで、出て来た英国人の方が「Amazing!」と言ってくれた時だった。これならまだ「あるある」だと思つたが、よほど私たちのクラス展示を気に入ってもらえたのか、もう一度、見に来てくれたのだ。これには私もうれしくなつてしまった。

そしてOPEN DAYは無事終了し、翌日、表彰式があった。そこでは「模造紙部門第一位」の他にも一つ、感極まる賞を頂いた。それは、「お客様賞第一位」だった。これは、来てくださったお客様の投票で決まる賞だ。OPEN DAYは、ただの自己満足ではなく、お客様のためにやるものだと思つているのでとてもうれしかった。

来年のOPEN DAY、完全一位を目指して頑張りたい。

『短い』時間の中で

中一 樋田 碧

「オープンデ이의準備期間、長いね。」オープンデイがくるまではそう思つていたのに、オープンデイが終わってしまった今となつては、とても短い時間だったなと思うようになった。

今年の中学一年生の企画は「空に描く夢」。飛行機についての企画である。この企画の中には、最新の飛行機、紙飛行機、ジブリに登場する飛行機、飛行機の歴史という四つのブースがある。私はその中の飛行機の歴史のブースを担当した。飛行機の歴史は他のブースと違い、模造紙にまとめず、双六のようにしてまとめた。最初、先生からこの案を聞いた時、とてもおどろいたが、今思えばそれが一番良い方法だったと思う。この作業は意外と大変なものだった。

まず最初に、台紙となる空の絵を描くため、裏紙ロールというものにペンキで絵を描く。次に、その台紙の上にはるものをつくる。そして、飛行機の形に切り抜いた画用紙の上に文章を書いてあるカードをはつたのだ。最後に、それを台紙にはつて完成だ。私はそれを先生と二人でつくり、どんどん完成していくのを見るのは楽しいものであった。

一生懸命に物事に取り組むと、時間が過ぎるのがとても早く感じる。オープンデイ準備期間の私は、自分達の企画を作り上げるのに、また、よりよい企画にするのに、一生懸命だったから、こんなにも時間が過ぎるのが速く感じたのではないだろうか。でも、私にとってはその短い時間の中で、多くの事を学ぶことができた。例えば、努力は絶対に実するという事、何事も丁寧に行えば、全てが悪循環にならずにすむという事、などだ。また、その作業が終わった後の達成感も大きかった。オープンデイ当日も、先生方から褒めて頂き、とても嬉しかった。

つた。

私がオープンデイを通して特に大切だと思つた事は「努力する」事だ。なぜなら、努力なしでは良い企画、充実した企画はつけないと分かつたからだ。でもこれはオープンデイだけに言える事ではない。努力をしないと何も始まらないという事も同時に分かつた。だから、約一カ月後にある期末テストに向けて、「努力」してみようと思う。

最後に、この「努力」の大切さを改めて知る良い機会となつた、このオープンデイに感謝する。そして、より良い生活を送れるようになれば良いと思う。



オープンデイ準備期間



オープンデイ当日の中庭



高2「NIPPON GO」

2016 UK-Japan Scientist Workshop

ケンブリッジ大学サイエンスワークショップ

高2 上坂 粹芳

この夏僕は、二つのサイエンスワークショップに参加した。それによってこの夏は学びの多いものになった。その内の一つがケンブリッジ大学でのものだ。

期待と不安を抱きながら日本から参加する生徒が来るのを待った。その夜の自己紹介は、予想通りでありながらも、衝撃的であった。五つの目がある化石が好きという人がいたときの衝撃はその中でも格別だった。そしてその時点で、彼らが僕たちとはまったく異なる知識を持った、面白い人たちであることがわかった。

ケンブリッジ大学でのサイエンスワークショップというだけあって、各プロジェクトの内容もそうそうたるものだった。僕のプロジェクトは放射線に関するものだった。身近にも思えるこのプロジェクトだが、つかった実験器具は見たこともないようなものばかりだった。アルファ線や、ベータ線を雲のような形で視認する機械や、実際に原発で使われているらしいウランのピペット等々このプロジェクトだからこそ使えるようなものばかりだった。

それだけすごいワークショップに参加する高校生にはやはりそれだけの実力があって、その中で自分の能力の足りなさを痛感した。そして普段の自分の怠惰を悔いた。しかし周りの仲間や、ファシリテーターそして教授の助けのおかげで、何とかついていくことができた。

このワークショップを終えて最終的にもったのは、なにもこれは、進んだサイエンスを学ぶためだけではなく、自分という個を見つめなおし、理系として進むならこれからどうあっていくべきかを考えるためのものであったように思える。それはもちろん勉強であったり、周りの人とののかかわり方であったりといろいろだ。そして言えるのは、このワークショップが、ぼくにとって、そして参加したすべての人にとって大きな糧となったのは間違いないだろうということだ。



2016 UK-Japan Young Scientist Workshop: Outline Timetable at Cambridge

2016	breakfast 8.00-9.00 Murray Edwards	morning session 9.15-	lunch	Afternoon session - approx 16.30	dinner 18.00-19.00 Murray Edwards	Evening 19.00-22.30 Kaetsu Centre
Sun July 17	participants arrive ~4pm at Murray Edwards College dinner in College 18.00. followed by meeting up in Kaetsu Centre Conference Room					
Mon July 18	B	Welcome and Orientation Kaetsu Centre	L	Projects	D	Let's Communicate in Japanese (led by students from Japanese students)
Tue July 19	B	Projects	L	Projects	D	Gift Exchange and Cultural Evening
Wed July 20	B	Projects	L	Projects (Teachers Forum Kaetsu Lecture Theatre)	D	Outdoor Games (informal relaxation)
Thu July 21	B	Whole Workshop Topical Discussion	Visits in Cambridge		D	Presentation Preparation
Fri July 22	B	Presentation Preparation	L	Team Presentations Kaetsu Centre	Workshop Dinner Clare College	
Sat July 23	B	Departure Leave to Heathrow 04:00, est arrival time 06:00 LH925 08:30 T2				

UCL-JAPAN Young Challenge 2016

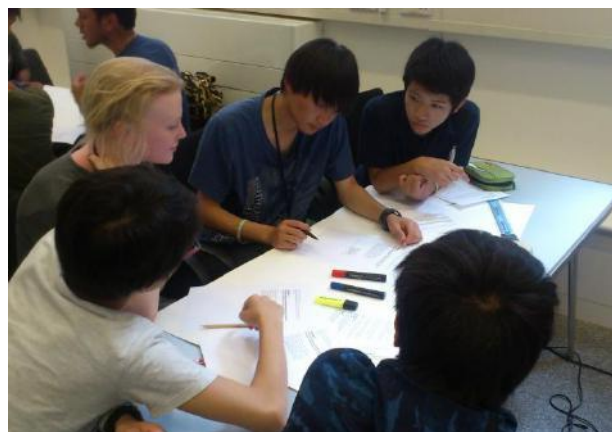
今年も UCL-JAPAN Young Challenge が 7 月 22～31 日に行われました。このサマープログラムは、2015 年にスタートしたもので、今年は第二回目の開催になります。開催の契機は今から約 150 年前、ペリー来航ののちに、長州藩と薩摩藩から英国にひそかに渡った人々がユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)で学んだことにあります。

1854 年、アメリカのペリー来航によって日本は鎖国方針を転換し、諸外国との外交を再びスタートしました。当初は日本人の海外渡航が許されぬ中、長州藩と薩摩藩から 2 つのグループが UCL で学び、のちに成立した明治政府の礎を築くにあたって大いに貢献する存在となりました。2013 年はその渡航から 150 周年にあたり、彼らの偉業を祝う様々な催しが行われましたが、その集大成として、将来グローバルに活躍する人材を育てるため、日英の優秀な高校生を集めて UCL を主会場としたサマープログラムを開催することになりました。立教英国学院は協賛団体として参画しています。

今年のプログラムは、教授や研究者の方による講義やワークショップ、メインイベントである Grand Challenge と題したディベートと発表を中心にした取り組み、英国で活躍する方々とのディスカッションの 3 本柱で構成されました。

	午前	午後	夜	場所
DAY 1	到着			立教英国学院
DAY 2	Icebreaking (初顔合わせの交流プログラム)			立教英国学院
DAY 3	(ケンブリッジへ移動)	ケンブリッジ観光	—	ケンブリッジ大学
DAY 4	研究者の方々による講義	研究者の方々による講義	ケンブリッジで学ぶ日本人学生の方々によるパネル・ディスカッション	ケンブリッジ大学
DAY 5	(UCL へ移動)	シェクスピア文学をテーマにしたワークショップ UCL 内ツアー	UCL の教授によるグローバル時代の講義 英国の大学で学ぶ学生による海外大学進学に関する講義	UCL
DAY 6	〈日本人高校生〉英語レッスン 〈英国人高校生〉日本語レッスン 研究者の方々による講義	Grand Challenge Workshop	英国で活躍する方々によるパネル・ディスカッション	UCL
DAY 7	〈日本人高校生〉英語レッスン 〈英国人高校生〉日本語レッスン 研究者の方々による講義	Disaster Symposium	レセプション	UCL
DAY 8	ロンドン内をスタンプラリー	グループプレゼンテーション	修了式 Farewell Party	UCL
DAY 9	ロンドン市内観光			UCL
DAY 10	ウィンザー観光		(帰国)	

参加者は、日本の高校から約 40 名、英国の高校からも約 30 名が参加し、取り組みはほとんど英語で行われました。夜は大学の宿泊施設で過ごし、共に宿泊した英国人高校生たちと夜遅くまでお喋りを続け、やや疲れ気味の様子も見られましたが、海外に羽ばたく気持ちを高めた者、新たな友を得て世界を広げた者、英語力に自信を強めた者、問題意識を高めた者など様々であったようです。特に、本校から参加した高校 3 年生の一人が、去年参加した時の口惜しさを払拭するべく、どこに於いても積極的に意見を述べ、質問を発し、英国人高校生たちとも交流を深めて、参加者たちのモデルケースとして活躍したことは、特筆に値するでしょう。



英語科フィールドワーク

第二回

今学期二回目の英語科フィールドワーク。Horsnamという大きな町に中学一年生・二年生合わせて二十四名で訪れた。今回の目的も前回と同様オープンデイ（文化祭）のビラ配りだったが、もう一つミッションを加えて更に高度なことに挑戦した。チラシよりもっと立派なカラーポスターをお店に貼ってもらうというミッションだ。

「チェーン店は難しいかも知れませんが個人経営の小さなお店が狙い目ですよ。」先生からアドバイスをもらって早速お店巡りを始めたが、イギリスは「チェーン店の国」、ポスターを快く貼ってくれるお店を探すのは難しい。

「マネージャーと相談しなきゃダメだっって言われました……」

「お店には貼れないけど、中のスタッフルームならいいって言われました！」

様々な報告がある。そして「証拠」として、貼ってもらったポスターとお店の人と一緒に写真を撮ってくる、というタスクもある。教科書で英語を習い始めてまだ数ヶ月の中学一年生達には少しタフではあったが、習った英語と単語を駆使すれば何とかなる、大切なのは勇氣と笑顔！これまで何度も行ってきたフィールドワークで彼らが実感していることだ。

その甲斐あって今回もかなり善戦した。そして良い写真を何枚も撮ってきた。

小雨が降りしきる生憎の天気だったのですが「今日はお店を中心に回るといいですよ。」とアドバイスをしたつもりだったが、前回のリベンジ！と道行く人に片っ端から声をかけている班もあった。

オープンデイのチラシを手渡して日時や内容を簡単に紹介してから最後に自分

の英語についてコメントを書いてもらうというタスク。

正味三十分のフィールドワークだが、表裏の用紙に全部コメントを書いてもらった女子生徒もいた。全部で十六人分あるので、コメントを書いてくれなかった人も合わせた、きつと二十人以上の人達に声をかけたに違いない。

もちろんあまりコメントをもらえなかった生徒もいた。一枚もポスターを貼ってもらえなかった班もあった。でも教訓はいつもある。今度はもっと積極的に話しかけよう。笑顔で話そう。勇氣を出して話しかけてみよう。

フィールドワークの目的は着実に達せられつつあると思った。



Where? house
Plan? with family
How big? 4
Message: Your English is very good!
I could understand all your questions!

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND

Where? At friends
Plan? YES
How big? NO
Message: Happy Christmas everyone.

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND

Where? At home
Plan? To spend time with my family.
How big? 5 foot
Message: Have a very merry xmas

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND

フィールドワークで使
したコメント用紙



Where? Cambridge
Plan? stay with family
How big? 2 daughters, son-in-law
& Grandson & Granddaughter
Message: Hope you enjoy all the
christmas festivities x

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND

Where? home
Plan? yes
How big? small
Message: Have a great
christmas

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND

Where? With family in Cambridge
Plan? To be all together and
have a great time
How big? 5 adults, 1 Grandson, 4
Granddaughters
Message: Enjoy your Christmas
Have fun, eat lots all the
best for 2017

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND

第四回

ここ数日秋にしては暖かな日が続いたが、今日は久しぶりに冷え込んだ。昨日がハロウィーン。町のあちこちにはまだカボチャのお化けや黒装束の魔法使い人形などの姿も見られるが、そろそろクリスマス飾りつけも始まる頃。ということで、今日の中学部一年生フィールドワークは「クリスマス」について、街を行き交う人たち、お店で働く人たちにインタビューをすることにした。

実質今学期のフィールドワークはこれが最終回ということもあり、また、これまでのフィールドワークでの獲得ポイントの累計を前日に発表したこともあって、今日は皆出かける前からかなりの意気込みだった。

「先生！余分のインタビュー用紙最初から貰えませんか？」

「今日は絶対Aさんに勝ちますよ！」

そう言えば、昨晚のうちに質問をワード文書にまとめてタイプをして覚えていた生徒もいた。

「今学期の獲得ポイントに応じて学期末にご褒美をあげますからね。」

中学一年ぐらいたとまだこういう動機付けにも素直に反応してくれる。

もちろんご褒美は用意してある。それ目当てでもしっかりとイギリスの人たちと会話をしてくればそれでいい。

実際、既にこの子達は英語で話す面白さを知っている。自分たちの英語が「使える道具」だということに気づいている。

あとは「もっと伝えたい！」という気持ちになるまで、このフィールドワークをしつかり楽しんでもらえればいいと思う。

Horshamの街に着くと、一緒に来た中学部二年生と別れて中学部一年生の担当する場所までみんなで歩いた。

「先生、まだ〜！」

「集合場所を確認してからね。」
「そこに着くまでにインタビュー始めてもいいですか！」

今日は一体どんなことになるのだろうか？明らかにいつもの二倍のテンションはあ

「はい、それではここに三時五分に集合ですよ。丸々十分はありますからしつかり聞いてらっしゃい。」ハロー！と三々五々散らばりながらも早速そこそこでインタビューが始まった。

「あつ、その人はちよつと急ぎ足だからやめた方がいいかも……」

と思うのは大人の感覚？ そんな人ともしつかりインタビューを始めている。中一くらいの日本人の子供が「I'm practicing English. May I ask you a few questions?」

と笑顔で近づいていったらよほどのことでない限り足を止めるしかないのかも。

今日は今までとは少し様子が違ってきたことにも気付いた。この子達は随分色々な人に話しかけられるようになった。

インタビューを始めたばかりの頃は、「なるべくゆっくり歩いている」老人に話しかけて「ごらんない。」と勧めていた

のだが、今はもう、若い人や子連れのお母さん、ビジネスマン風の男性やちよつと怖そうなお兄さんにまでインタビューをし

ている。歩道に並べられたカフェのテーブルでお茶をしている人たちに話しかけた

り、停留所待バスを待っているおばさん達のところへ行ったり……。あまり人を選ば

なくなってきた気がする。誰にでも話しかけられる勇氣、あるいは自信みたいなものが持

てきたのかもしれない。

集合時間になるといつも通りの「あともう一人だけいいですか？」「この場所で聞

くならないでしょ？」が始まった。

視界にはほぼ全員集まっているのだが、なかなかインタビューが途切れず、切り上げるタイミングが難しい。

「はい、それでは行きますよー！中二の先輩たちが待ってますからねー！」
駐車場へと歩く道すがら、今日のポイント数を言い合いながらワイワイガヤガヤと楽しそうにやっていた。

インタビュー用紙を集めて教員室に戻り、今日の収穫を一枚一枚見ていく。「クリスマスメッセー」を書いてもらうという欄もあるのだが、いろいろなメッセー

があった。

「Have a lovely Christmas! "Good luck and enjoy your stay in England!" "Well done! Better than my Japanese!" "Very good English. Very brave." "Enjoy your Christmas and have fun, eat lots! All the best for 2017!" "Ho Ho Ho Santa's coming to get you!" などなど。」

子供達がホーシヤムの街で集めてきたイギリスの人たちからの温かいメッセー

ジ。そう言えば……少し冷え込み始めた曇り空の下でのインタビューだったのに、生徒たちと話していた人たちはみんな優

しそうな笑顔だった。もうすぐそこまで近づいているクリスマスがみんなを幸せな

気分にしてたのかも知れない。そんな人たちが書いてくれた直筆のメッセー

ジを見ながら地元のイギリス人の温かさをひしひしと感じた。「英語」はもちろん、それよりももっと大切なものを学んでいる子供達が少し羨ましくなった。

今学期最後のフィールドワークも大成功だった。

英語科フィールドワーク

中学部1年生、2年生は週に1回英語の授業で町へ外出し、教室で学んだ英語を実際につかっています。今学期はオープンデイと、クリスマスについてのインタビューを行いました。本誌では第2回、第4回についての記事を掲載いたします。この他の回は本校ホームページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。



小学生 Active English 学びのねらい

Active English では名前の通り、英国で英語を学ぶ機会を生かして、あらゆる角度から積極的に英語を学ぶことを目標としています。具体的には、英語を聞いて、相手（話者、著者）の気持ちを理解し、自分の気持ちを英語で表現することを活動の中心としています。英語を学ぶことに終始するのではなく、英語劇、英語の映画、読み聞かせ、イギリス児童文学を通して、感受性を豊かにすることも重要視しています。

英語の授業（Active English）で映画鑑賞に行ってきました。小学6年生は、週に4回の EC（英会話）の授業とは別に、夕食後の時間をつかい、週に3回英語の授業を行っています。今学期はイギリスの作家ロアルド・ダールの作品を読んでいます。

ロアルド・ダールの作品が映画化されたものを Guildford の映画館に観に行きました。

その感想を英語で書き、プレゼンテーションも行いました。生徒の感想を紹介します。

☆My Film Review - The BFG -☆

P6 Masato Yano

What I like is the way he speaks. He makes a lot of mistakes when he speaks.

I learnt that BFG is a nice giant and he doesn't care when he makes a lot of mistakes while he is speaking. So I want to be like BFG but I don't want to make mistakes.

My favourite part is that the queen and servants drank frobscottle and did a very enormous fart. They even flied little!!!!

総合的な学習の時間

Active English での学びが他教科でも生かされています。今学期の総合学習では、学校で働くスタッフにインタビューを行い、「スタッフ紹介」の掲示物を作成しました。掲示物は教室棟の入り口に掲示し、インタビューをしたスタッフへ英語でのプレゼンテーションも行いました。



小学生

ACTIVE ENGLISH

部活動での活躍



バレーボール部
BEDE'S CUP 優勝



軽音楽部校内コンサート



サッカー部対外試合
VS HURTWOOD HOUSE

フラワーアレンジメント部

立教のフラワーアレンジメント部ではクリスマスに向けてチャペル前に飾るリースを作りました。日本では毎年使える造花のリースをよく見かけますが、ヨーロッパではその年毎に生のリースを飾るのが一般的。中でも乾燥させたオレンジやシナモンなどの Christmas scents を使ったリースは、爽やかな香りが広がりクリスマスの雰囲気をもっと盛り上げてくれます。

チャペルにリースが飾られた日の朝、礼拝でチャプレンがリースの持つ意味をお話してくれました。リースは赤、緑、白を用いて作られることが多いのですが、それらの色は「キリストの血」「生命力」「純潔」をそれぞれ表しているのだそうです。またクリスマスの一か月前になると、教会では水平に置いたリースの上に、ろうそくを4本立て、毎週1本ずつ灯りをともしていきます。これをアドベント・クラウンツといいます。1本1本ろうそくに灯をともしながら心穏やかにクリスマスを待ち望む。生徒の作ったリースが、立教のクリスマスに素敵な彩を与えてくれることでしょう。



地域との交流

英国人の友だちが出演するミュージカル「Annie」観劇

中学部一年の女生徒は地元のガールガイズの活動に参加しています。さまざまな活動を通して、回数を重ねるごとに地元の子たちとの英語でのコミュニケーションも増えていきます。今回はガールガイズの友だちが出演するミュージカル「Annie」を見に外出しました。

シアターへ行くまでの車の中では、アニーのあらすじを読む、内容を知っている子らの話を聞く、「最近あの子はガールガイズを休んでいるからミュージカルの練習を頑張っているのだと思う」という話をしたり、アニーの「tomorrow」を歌ったり、ミュージカル鑑賞の準備は万端です。ミュージカルが始まるとすぐに友だちの姿を舞台に見つけました。いつもとは違う友だちの姿に感動すると同時に、良い刺激を受けることができたことでしょう。英語でのミュージカル鑑賞は中学部一年生には難しすぎるのではないかと心配もありましたが、普段の英語学習や予習のおかげ、内容を理解しミュージカルを楽しむことができました。

公演は地元のアマチュア団体によるものでしたが、歌やダンス、セット、音楽などは、流石は演劇の本場イギリス、プロさながらのものでした。生徒たちは二時間以上の英語でのミュージカルに最後まで集中していました。イギリスでのミュージカル鑑賞はとても良い経験になったことでしょう。今後も英国の文化や社会に直接触れ合う機会を大切にしていきたいと思えます。

地元のユースクラブ訪問（小中学生）

小学部と中学部二年生が地元のユースクラブを訪問しました。

ユースクラブの子供たちは毎週教会のホールに集まりさまざまな活動をしているそうです。

今回は本校の児童・生徒が折り紙とお茶についてのワークシヨップを行いました。折り紙では、グループごとに工夫をして折り方を教えることができました。「英語で何て言うの?」と友だちに聞いたり、自分の知っている単語をつかったりして、折り紙についてはもちろん、学校生活のことなどの会話をしながら作品を作り上げました。中には、地元の子に日本語を上手に教え、「こんにちわ」「こんにちは」「わたしのなまえは」「わたしのなまえは」「わたしのなまえは」と、まるで英語の授業の先生と子供たちのように繰り返す言い、ホールに日本語を響き渡らせるグループもありました。

折り紙の後には、先日のオープンデーで「日本茶」についての展示を行った小学生が、日本茶の入れ方についてのワークシヨップを行いました。真剣に日本茶の説明をする子と実際にお茶の入れ方を見せる子の息はぴったりです。地元の子供たちも彼らの説明に興味津々です。入れ方を見せた後は、試飲タイム。「too hot」と気をつかいながらお茶を配る子、おかわりをすすめたらと先生に言われると、「Would you like more?」と自然に言う子供たちの姿には感心しました。

恥ずかしがらずに普段学んでいる英語をつかおうとする子供たちに、遅しさと同時にフィールドワークや普段の学びからの大きな成長を感じました。今後もこのような活動に積極的に参加していきたいと思えます。

ルーマニアの寒村の子供たちに贈る、靴箱につめたプレゼント Christmas Shoebox Appealへの取り組み

昨年小学生のクラスで取り組んだ Christmas Shoebox Appeal。今年も小学六年生と中学一年生が取り組みました。

十月ごろ、去年参加した立教生たちから「やらないの?」「今年もやりたい」という声が聞こえ始め、Christmas Shoeboxのことを話すと全員の賛同が得られたので、今年もまた取り組むことにしました。

Shoebox Appealはチャリティー活動ですが、今の自分の生活とは異なる環境の子ども達へ贈るプレゼントですから、受け取る人の気持ちを考えて、靴箱に入れるものを考えなければなりません。取り組みのチラシの写真からどんな生活をしているのかを思いめぐらせ、どんなものを買ったらよいかをリストアップしてゆきます。何歳の子どもへのプレゼントにしようか、女の子か男の子か、も決めました。二三人で一箱を作ることにして、一人六ポンドずつを出し合い、予算は十二ポンド。多くはない金額の中で、できるだけたくさんのお物を入れられるように、でも役立つもの、入っているとうれしいもの、ふたをあけると「わあ」と喜んでもらえるものを一生懸命考えて、買えるものにゆきました。

電卓片手に、調整しながら物をカゴに入れてゆくのも勉強です。「たくさん使えるようにしてあげたい」「これはかわいい柄だからうれしいと思う」「あったかいセーターを一つふんばつするから、ほかの物は出来るだけ安いものでそろえよう」……パッケージのデザイン、質、量、色なども見て、何を大切に選ぶか。ペアで意見を交わしながら、考え考え、決めている様子が見られました。

買ってきたもののタグをはずして靴箱につめると、手で抱えられるくらいの箱に、



靴を買ったあとに残る靴の空き箱に、こまごまとしたプレゼントを詰めて贈るというチャリティー活動の一つです。地元克蘭リー村の克蘭リー教会とロータリークラブが主宰するシュボックス活動では、ルーマニアの寒村の子供たちにクリスマス・プレゼントを送り届けます。

ささやかですけれども細々としたものがたくさん詰まったプレゼントボックスができあがりました。今年も何人かが、「こんなプレゼント、自分もほしいなあ!」です。去年も同じことを聞きました。十一月十四日に村のロータリークラブの方が学校まで引き取りに来て下さいましたので、一人一人プレゼントボックスを渡して、無事終了。十二月になりましたから、そろそろクラブの方がルーマニアへ車ではるばる運んで下さっていることでしょう。

交換留学生の滞在(中学部二年)

十月三十日から一週間、中学部二年生の教室にイギリス現地の学校から短期留学生が来ました。同じ年齢の日本語を学んでいる生徒です。留学生を迎えることは中学部二年生にとっては初めての経験。

「いつから来るの?」「イギリス人の子?」「スポーツは何をしていますか?」「ちゃんと話してできるかな?」

生徒会主催のギルフォードへの外出の行われた日の夕方、留学生は学校にやってきました。Helloという緊張感いっぱい挨拶を交わし、一週間の始まりです。この日のクラスのホームルームでは自己紹介をしました。ほとんど生徒が恥ずかしそうに名前とよろしく願いますと言っただけでした。留学生はこの日から立教英国学院の一員として、衣食住すべてを本校の生徒と共にします。もちろん、授業もすべて一緒に出席です。英語の授業では、留学生がみんなの勉強のお手伝い。他の授業では、先生の話している内容をクラスみんなで協力して勉強内容を伝えました。

あつという間の一週間でした。お別れの日、最後にクラスで一人ずつメッセージを伝えました。「このクラスに来てくれてありがとう」「一緒にダンスができて楽しかったよ」「この一週間はクラスがいつもより明るくなったように感じました」。しっかりと表現した思いは、留学生にも伝わっている様子を強く感じました。別れを惜しむ中学部二年生と留学生の姿に言葉や文化の壁は全く感じられませんでした。お別れの日にはイギリスのガイフォークスデイ。留学生を見送った後の夜空にはきれいな花火が見えました。達成感と寂しさで一杯の生徒たちへのプレゼントのようにも感じました。この一週間だけでなく、これからの長い将来にわたって、お互い学

Sorry you are leaving...

23年間清掃担当を務められた Mr. Heather が離任されます。学校行事の前には朝4時から校内の清掃をしてくださるなど、学校生活をサポートしてくださいました。今までありがとうございました。



び助け合える関係が続くことを願っています。留学生と共に過ごした時間は、真の国際人へ向けた確実な一歩となったことでしょう。